

わたしの シロ

シロが いません。

赤ちゃんの ときから、ずっと いつも くらしていた シロが いません。
わたしが よぶと、すぐに こたえる シロが いません。

けさの 地じんで、こわれた 家から やつとの ことで はい出た わたし。

「シロー。シロー。」

名前を よんでも、へんじを してくれません。
自分で 外へ 出たのかな。
じこかへ にげたのかな。

ひなんしょに むかう 間も、お父さんや お母さんと こっしょに、
「シロー。シロー。」

と よんでも みましたが、シロは こたえません。

夜になつても、つぎの 田の 朝に なつても、また、その つぎの 田に なつても、シ
ロが いません。

五田畠の 朝、みんなで こわれた 家の かたづけを しました。
こわれた げんかんの くつばこの 下に、白い ものが 見えました。

「シロだ。」

お父さんも お母さんも わたしも、ぐつたり してくる シロを、こっしょうかんめい
すけようと しましたが、はしらや かべが おもずきます。

「シロー。」

きんじょの 人や、通りかかった きゅうじょたの 人たちも てつだつて くれました。
シロは、たすかりました。

わたしは、けがをしている シロを ぎゅっと だきました。

シロは、「クーン、クーン。」と なきながら からだを すりよせて きます。

わたしの なみだは、止まりませんでした。

見ていた 人は、はぐ手をして いました。